

「地域アート」問題をめぐって

湧川依央理（横浜国立大学）

近年、芸術祭やアートフェスティバルは日本の各地で開催されており、そこで展示される作品もインスタレーションからコミュニティ・アートと呼ばれるものまできわめて多岐にわたっている。それらの評価に関しても、さまざまな立場の人たちがそこに関わっており、一般化して語ることは難しい。評論家の藤田直哉はこれらを「地域アート」と呼び、その問題点について指摘している。

発表者は大学の学部時代に友人とコミュニティ・スペースを作り、そこで各種のイベントやアートプロジェクトに関わってきた。それがきっかけとなり地域アートや、そこで展示される作品に関する研究を行っている。しかし地域アートにおける問題はどれにも等しく当てはまるものではなく、その問題を語る立場が明確にされていないため、きわめて語りにくい問題であるように思われる。日本で行なわれているアートプロジェクトを語る上で必要と思われるさまざまな歴史的な文脈と、美術理論、そして議論の中心である“はず”の作品そのものについて、さらにそれらを語る立場について、整理できる点を明確にした上で、あらためて「地域アート」について考えてみたい。

大規模な芸術祭／国際美術展の起源として1895年から始まるヴェネチア・ビエンナーレがある。1990年代以降、光州（韓国）をはじめとして、アジア各地でも芸術祭が広がり始めた。日本では2001年の横浜トリエンナーレが最初の国際美術展となるが、現在大小含め百を超える芸術祭や地域アートが開かれるようになるまでの流れも見ていきたい。加治屋健司は日本のこのような芸術祭の源流としての「野外芸術」と「パブリックアート」をあげている。そして日本では2000年以降、とりわけ東日本大震災以降に芸術祭が数多く開催されるようになった。これらにおいては、地域住民も含めた「参加型アート」が増えてきている。

参加型アートプロジェクトについて述べる際、しばしば持ち出されるのがニコラ・ブリオー（Nicolas Bourriaud）とクレア・ビショップ（Claire Bishop）の名前であり、ブリオーは、現代アートはアーティスト・作品・鑑賞者の間で構成される「関係性」を重視しなければならないとし、「非物質的な関係」を重視するアートを「関係性の美学」という言葉でまとめ、評価した。対してビショップは「関係性の美学」において語られる作品は自助的でマイクロユートピア的であると批判した。これらの理論についても再検討していきたい。

日本の現代アートのひとつの特徴であると言えるこれら地域アートや参加型アートプロジェクトはどのようなものか、それは私たちがどこに導くのかという問いをめぐって考察していきたい。